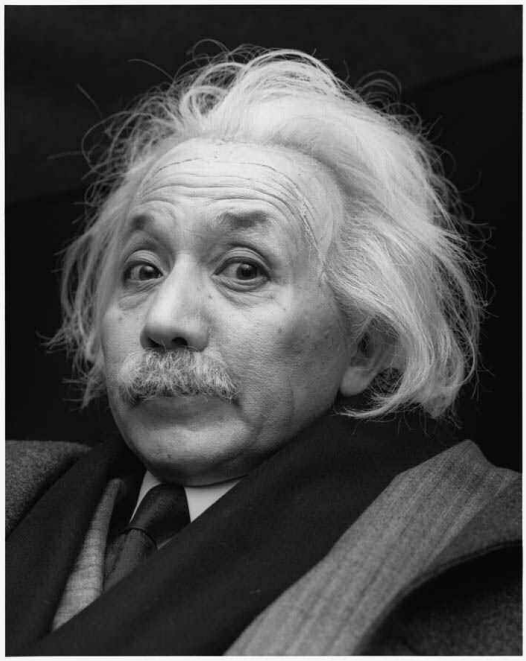
Morimura Yasumasa
A Requiem: Art on Top of the Battlefield
森村泰昌
なにものかへのレクイエム―戦場の頂上の芸術



なにものかへのレクイエム（宙の夢／アルベルト1）2007 年　写真

会期等　2011 年 1 月 18 日（火）～4 月 10 日（日）　72 日間
月曜休館、ただし 3 月 21 日（月･祝）は開館し、翌 22 日（火）休館
開館時間 10：00～18：00、金・土は～20：00（入場は閉館 30 分前まで）

会　場　兵庫県立美術館　3階　企画展示室
〒651-0073　神戸市中央区脇浜海岸通 1-1-1 TEL 078-262-0901　http://www.artm.pref.hyogo.jp

主　催　兵庫県立美術館、産経新聞社、神戸新聞社

後　援　兵庫県、兵庫県教育委員会、神戸市、神戸市教育委員会、関西テレビ放送、サンケイスポーツ、夕刊フジ、サンケイリビング新聞社、サンテレビジョン、ラジオ大阪、ラジオ関西

協　賛　株式会社資生堂、富士フイルム株式会社、株式会社ニコン、株式会社ニコンイメージングジャパン

協　力　ＮＥＣディスプレイソリューションズ株式会社、写真弘社、ShugoArts、財団法人草月会

観覧料　一般 1200（1000）円、大学生 900（700）円、高校生・65 歳以上 600（500）円、中学生以下無料
※（　）内は、前売り料金及び 20 名以上の団体割引料金（高校生・65 歳以上は前売りなし）
※障害のある方とその介護の方 1 名は各当日料金の半額（65 歳以上は除く）
※コレクション展の観覧には別途観覧料金が必要（本展とあわせて観覧される場合は割引あり）

海の幸･戦場の頂上の旗 2010 年 映像

展覧会概要

森村泰昌（1951－ ）は、大阪を拠点に国際的な活躍を続ける美術家です。名画の登場人物や女優などに自らが「なる」というユニークな手法で、80 年代より一貫してセルフポートレートの写真作品に取り組み、国内外で高い評価を得てきました。本展では、20 世紀の男たちをテーマとする最新シリーズ〈なにものかへのレクイエム〉を、完全版で紹介します。
美術史や女優をとりあげたこれまでの作品では、女性に変身するイメージの強かった森村。今回のシリーズでは一転して、三島由紀夫やゲバラ、アインシュタインやピカソなど、戦争と革命の 20 世紀を生きた男たちの姿に挑みました。さらに「硫黄島の星条旗」など、歴史的瞬間をとらえた報道写真を題材に、独自の解釈で過去を検証し、現代に甦らせます。
このシリーズは 2006 年に最初の作品が発表されて以降、森村の新境地として話題を集めてきましたが、地元関西では今回が初の展示となります。レクイエム、それは過ぎ去った人物や時代への哀悼と敬意をこめつつ、その姿を未来へ伝えること、と森村は言います。森村の作品世界を通じ、20 世紀という時代にあらためて触れることが、21 世紀の私たちにとって今そして未来への手がかりを得る機会となれば幸いです。

本展は 2010 年 3 月、東京都写真美術館を皮切りに、豊田市美術館、広島市現代美術館と巡回し、兵庫県立美術館が最終会場となります。特に兵庫会場においては以下の点にもご注目ください。

世界のモリムラ、地元関西で 12 年振りの大規模個展

世界で活躍を続ける森村。たびたび各地の美術館で個展も開かれていますが、地元関西の美術館では、1998 年の京都国立近代美術館における「森村泰昌[空装美術館]絵画になった私」以来、実に 12 年ぶりの大規模な個展となります。

モリムラが「男」になった!? 話題の新作シリーズ、関西初展示

2006 年から始まった話題の新作シリーズ〈なにものかへのレクイエム〉ですが、これまで関西では本格的に紹介されておらず、全作品が初の展示となります。森村の新展開を初めてにして完全版で目撃する貴重な機会です。

知られざるモリムラ!?－小企画展を同時開催

同時期にコレクション展の小企画として森村の個展「「その他」のチカラ。－森村泰昌の小宇宙－」を開催します（～3 月 13 日）。こちらはあるコレクターが蒐集した森村作品約 80 点を展示。小品、「書」、オブジェなどの珍しい作品により、「主要」作品とはひと味違った森村の「その他」の魅力を紹介します。対照的な２つの展覧会によって、森村の多面的な魅力に触れていただけることでしょう。

章構成・出品点数（総点数写真 35 点、映像８点、計 43 点）

第1章　烈火の季節（写真 13 点、映像１点）

第１章は、2006 年にシリーズの第一弾として発表された作品群により構成されています。浅沼事件やベトコンの処刑、三島由紀夫など、1960 年代から 70 年代にかけての有名な報道写真をもとに、政治や戦争を舞台に、至近距離で男たちの思想と肉体がぶつかりあった時代を作品化しています。

映像作品《烈火の季節／なにものかへのレクイエム（三島）》で三島となった森村は、現代の芸術を憂い決起を呼びかけて絶叫します。激しく直接的なメッセージは、森村の新たな展開を強く印象づけるものです。

なにものかへのレクイエム（MISHIMA 1970.11.25–2006.4.6）2006 年　写真

なにものかへのレクイエム（ASANUMA 1 1960.10.12–2006.4.2）2006 年　写真

第2章　荒ぶる神々の黄昏（写真 10 点、映像４点）

2007 年にシリーズ第二弾として発表された作品群。レーニン、ゲバラ、アインシュタインといった、20 世紀の偉人たちの肖像がとりあげられています。

ロシア革命の指導者レーニンは、不況に苦しむ日雇い労働者が集まる大阪の釜ヶ崎に登場します。チャップリンの有名な映画『独裁者』にもとづく映像作品《なにものかへのレクイエム（独裁者を笑え／スキゾフレニック）》では、ヒトラー＝ヒンケル（チャップリン）に扮した森村が、21 世紀の独裁者について語ります。元となる過去のイメージに、現代のさまざまなイメージが重ねられることで、過去の記憶は今そして未来へと受け継がれてゆきます。

なにものかへのレクイエム（遠い夢／チェ）2007 年　写真

なにものかへのレクイエム（独裁者はどこにいる1）2007 年　写真

第3章 創造の劇場（写真８点、映像２点）

すべて本展のために制作された新作です。森村は、ピカソ、ウォーホル、手塚治虫など、20 世紀の芸術家から 10 人を選び、そのポートレイトに挑みました。

ポップアートの巨匠ウォーホルが、女装したウォーホル自身を撮るという映像作品。イヴ・クラインの虚空を跳躍する写真では、舞台であるパリが、どこかなつかしい大阪の風景に入れ替わっています。これらの作品は、森村流の作家論であるとともに、独自の想像的、創造的な美術史を描く試みと言えるでしょう。

なにものかへのレクイエム
〔創造の劇場／パブロ・ピカソとしての私〕
2010 年　写真

なにものかへのレクイエム
〔創造の劇場／イヴ・クラインとしての私〕
2010 年　写真

第4章　１９４５･戦場の頂上の旗（写真４点、映像１点）

すべて本展のために制作された新作です。第二次世界大戦が終結した 1945 年に焦点をあて、昭和天皇とマッカーサーの会見、タイムズスクエアでの戦勝を祝うキスなど、歴史の転換点をとらえた写真が題材となっています。

映像作品《海の幸・戦場の頂上の旗》では、硫黄島に星条旗を掲げるという有名な一枚の写真から出発し、夢幻劇とでも言うべき世界が繰り広げられます。そこで焦点をあてられているのは、多くの無名の人々です。「あなたなら　どんな形の　どんな色の　どんな模様の　旗を掲げますか。」20 世紀とはどのような時代であったのか、という展覧会のテーマを、ひとりひとりのあなた自身の問題として問いかけつつ、展覧会は締めくくられます。

海の幸･戦場の頂上の旗 2010 年　映像

なにものかへのレクイエム
〔記憶のパレード／1945 年アメリカ〕
2010 年　写真

森村泰昌プロフィール

1951 年　大阪に生まれる。
1978 年　京都市立芸術大学卒業。
1985 年よりセルフポートレイトの作品制作を開始。
1988 年「ヴェネツィア・ビエンナーレ　アペルト ’88」、
1989 年「アゲインスト・ネイチャー」（サンフランシスコ近代美術館他巡回）に出品。
以後、国内外の多数の展覧会に参加。
代表作に古今東西の名画を題材にした〈美術史〉シリーズ、
映画の登場人物を題材にした〈女優〉シリーズ、
フリーダ・カーロを題材にした「私の中のフリーダ」や、
スペインの巨匠ゴヤの版画集「ロス・カプリチョス」を題材に
現代諷刺を展開した「ロス・ヌエボス・カプリチョス」など。
その他、演劇『パンドラの箱』（野田秀樹作、蜷川幸雄演出、1999 年）や
映画『フィラメント』（辻仁成監督、2002 年）に出演、著作多数。

主な個展：

1990 年　「美術史の娘」佐賀町エキジビット･スペース、東京
1996 年　「森村泰昌　美に至る病–女優になった私」横浜美術館
1998 年　「森村泰昌[空装美術館]絵画になった私」東京都現代美術館／京都国立近代美術館／
　　丸亀市猪熊弦一郎現代美術館
2001 年　「私の中のフリーダ / 森村泰昌のセルフポートレイト」原美術館、東京他
2002 年　「森村泰昌写真展　女優家 M の物語」川崎市市民ミュージアム
2007 年　「森村泰昌：美の教室、静聴せよ」熊本市現代美術館／横浜美術館

主な著書:

『美術の解剖学講義』平凡社、1996 年
『芸術家Mのできるまで』筑摩書房、1998 年
『「変わり目」考－芸術家Mの社会見学』晶文社、2003 年
『時を駆ける美術－芸術家Mの空想ギャラリー』光文社、2005 年
『「美しい」ってなんだろう？－美術のすすめ』理論社、2007 年
『手の美術史』二玄社、2009 年
『露地案先生のアンポン譚』新潮社、2010 年

受賞歴：

東川賞（2002 年）、織部賞（2003 年）、京都府文化功労賞（2006 年）、
芸術選奨文部科学大臣賞（2007 年）

関連事業　**「自作を語る／レクイエム、それから」**

１月 23 日（日）14：00～15：30

講師：森村泰昌氏（出品作家）

ミュージアムホールにて（定員 230 名、当日 11：00 より整理券配布）　聴講無料

※兵庫県立美術館「芸術の館友の会」共催事業　会員優先予約あり

※会期中に別途、記念対談を予定しています。（３月頃）

学芸員による解説会

2 月 5 日（土）、3 月 5 日（土）、4 月 2 日（土）16：00～（約 45 分）

いずれもレクチャールームにて

ミュージアム・ボランティアによる見どころ案内

会期中の毎週日曜日　11:00～（約 15 分）

レクチャールームにて

おやこ解説会

2 月 12 日（土）、3 月 5 日（土）、4 月 2 日（土）13：30～14：00

いずれもレクチャールームにて

同時開催　**2010 年度コレクション展Ⅲ　小企画**

「その他」のチカラ。－森村泰昌の小宇宙－

平成 22(2010)年 11 月 20 日（土）～平成 23(2011)年 3 月 13 日（日）　常設展示室６にて

林勇気展

平成 23（2011）年 2 月 18 日（金）～3 月 19 日（土）　※最終日は 17:00 まで

ギャラリー棟 1 階アトリエ１にて

お問合せ先　兵庫県立美術館　〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1-1-1

ホームページ http://www.artm.pref.hyogo.jp

【企画内容に関すること】　担当学芸員　江上　ゆか、出原　均

TEL:078-262-0909（直）　FAX:078-262-0913

【取材・写真提供に関すること】営業・広報グループ

TEL:078-262-0905（直）　FAX:078-262-0903

広報用画像について

このプレスリリースに掲載されている画像データをプレス掲載用にご用意しております。別紙の申込書をご使用ください。

兵庫県立美術館
HYOGO PREFECTURAL MUSEUM OF ART
〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通 1-1-1
電話（078）262－0905（直通）

Morimura Yasumasa
A Requiem: Art on Top of the Battlefield
森村泰昌
なにものかへのレクイエム―戦場の頂上の芸術

営業・広報グループ　宛
ＦＡＸ（０７８）２６２－０９０３

ご希望の写真の番号に〇をつけてください。後日お送りいたします。また、読者・視聴者プレゼント用招待券(最大 10 組 20 名まで)もご用意しております。ご希望の場合は、ご請求ください。

番号	作家名･作品名･制作年･素材･その他 (クレジット等)
1	なにものかへのレクイエム (宙の夢／アルベルト1) 2007 年　写真
2	海の幸･戦場の頂上の旗 2010 年　映像
3	なにものかへのレクイエム (MISHIMA 1970.11.25 – 2006.4.6) 2006 年　写真
4	なにものかへのレクイエム (ASANUMA 1 1960.10.12 – 2006.4.2) 2006 年　写真
5	なにものかへのレクイエム (遠い夢／チェ) 2007 年　写真
6	なにものかへのレクイエム (独裁者はどこにいる1) 2007 年　写真
7	なにものかへのレクイエム (創造の劇場／パブロ･ピカソとしての私) 2010 年　写真
8	なにものかへのレクイエム (創造の劇場／イヴ･クラインとしての私) 2010 年　写真
9	海の幸･戦場の頂上の旗 2010 年　映像
10	なにものかへのレクイエム (記憶のパレード／1945 年アメリカ) 2010 年　写真

貴社名			
媒体名	新聞・雑誌・ミニコミ TV・ラジオ・インターネット		
ご担当者名			
ご住所	〒		
電話番号		ＦＡＸ	
メールアドレス	@		
URL			
掲載･放送予定日			
写真到着日希望			
読者・視聴者プレゼント用招待券（最大 10 組 20 名まで 本展を媒体でご紹介いただける場合に限ります）	組　　名分希望		

※　写真データ使用は、本展覧会の紹介用のみとさせていただきます。それ以外での使用はできませんので、ご了承ください。
※　本展に関する記事をご掲載いただきました際には、お手数ですが、掲載誌・紙または記録媒体（VTR/DVD）などを、下記宛にお送りくださいますようお願い申し上げます。
※　本展覧会会場の取材、撮影をご希望の場合は、上記までご連絡ください。事前にご連絡のない取材･撮影はお断りいたします。